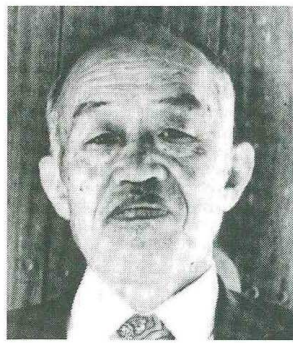


高山の文化を高めた人々 41

不屈の学人 大野 政雄

田中 彰



大野政雄先生は明治四十二年に生まれ、飛騨の歴史研究と文化財の保存に尽力された不屈の学人である。

先生は昭和七年から四十五年まで公立高等学校の教諭を務め、その傍ら歴史調査に生涯をかけ、郷土史研究と考古学において優れた足跡を遺し、多くの後継者を育成した。

昭和二十六年の夏には、国府町「村山遺跡」の発掘調査を行い、縄文前期（約六千年前）の住居址一基と一万点に及ぶ土器、石器を発掘。二年後の昭和二十八年には遺物の一部を東京大学に移し、日本考古学の先達である駒井和愛、

山内清男、八幡一郎の指導を受けた。その後、昭和三十五年には岐阜県下で初めての名著『村山遺跡』報告書を刊行した。

遺物整理の協力者には、佐藤達夫、江坂輝弥、芹沢長介、坪井清足ら、日本考古学を背負うことになる学人がいたのである。村山遺跡の功績により、岐阜県下第一号の「日本考古学協会会員」となり、岐阜県の考古学をリードしていくことになる。

その後、昭和四十五年、国道四一号のバイパス工事にかかった冬頭王塚古墳の発掘調査にたずさわり、竪穴式石室を二基発掘、出土器などから高山市内（当時）で一番古い古墳と判明した。発掘調査費用も無く、期間も二カ月弱という悪条件の中での発掘調査であったが、高山の古墳時代を解明しなければという、先生の強い意志により、大きな成果が得られたのである。

古墳は、国道バイパスの位置から少しずれて発見されたため、保存することが可能になり、市指定史跡となった。また、出土した鉄剣・鏡なども考古資料として市の文化財に指定、現在、赤保木町にある風土記の丘学習センターで展示されている。

一つひとつ丁寧に遺物、遺跡と向き合い学問を極める先

生の姿勢は、岐阜県の考古学発展の基礎となった。

高山市の文化財審議会委員は昭和三十年から、岐阜県の文化財保護審議会委員は昭和三十五年から就任し、長きにわたって文化財の指定と調査に尽力した。

文化財の指定基準に對する考え方は厳しく、年代、歴史性、民俗性、法量など一定の基準を超えないものは指定すべきではないと、厳しく思慮し、文化財指定の基本的方針をつらぬいての対応であった。

辻ヶ森三社境内の寺院建物跡を、国分尼寺金堂跡として指定する時には、先生は「建物跡はわかるが、国分尼寺の建物である証拠は？ 地方豪族の氏寺の可能性もあるのでは？」と質問、一メートルに及ぶ版築（土を何層にも叩き締めて基壇を作ること）は国家の寺である官寺でないと出来ないと言明したところ、即指定の示唆をされた。そこには史料に向き合う厳しい姿勢と、将来に向けての史跡保存を思う先生の心があった。

一方、田中大秀の研究も一生涯継続し、大秀史料の真贋鑑定、文書解説、文学、歴史的考察など、右に出るもの無



国府町村山遺跡

しといわれた。大秀の字体は難しく、容易に読み下しができないものではない。著書に『田中大秀』（松室会編著・昭和二十九年）、校訂・執筆に『田中大秀翁伝記』（高山市発行平成八年）がある。後者の伝記は、これまでの先生による大秀史料集大成である。

前書きの中で先生は、「大秀の目指した国学は人間の本質である風雅に生き、古典を研究して民族の独自性を実証する、自由で新鮮な魅力あふれる学問であった。人間解放の新鮮な、みずみずしい学問であったことを理解すべき」と記されている。

先生は幅広く歴史研究をなし、至誠明朗にして常に旺盛な責任感と研究心をもって郷土史研究に邁進し、歴史を正確に後世に残すという信念に生きた不屈の学人であった。平成十九年四月十一日、九十八歳で逝去された。